文献探訪：『ヒトはなぜ笑うのか』

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 大阪市立大学大学教育研究センター 公開日: 2017-05-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 佐金, 武 メールアドレス: 所属: 大阪市立大学
URL	https://doi.org/10.24544/ocu.20171218-028

In April 2022, Osaka City University and Osaka Prefecture University marge to Osaka Metropolitan University

Title	文献探訪 ： 『ヒトはなぜ笑うのか』
Author	佐金, 武
Citation	大阪市立大学大学教育. 14 巻 2 号, p.53-55.
Issue Date	2017-04
ISSN	1349-2152
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学大学教育研究センター
Description	マシュー・M・ハーレー他『ヒトはなぜ笑うのか』、片岡宏仁(訳)、勁草書房、2015 年 ：ISBN:978-4326154326
DOI	10.24544/ocu.20171218-028

Placed on: Osaka City University

Osaka Metropolitan University

■ シリーズ

文献探訪 Book Review

佐金 武（大阪市立大学文学研究科・哲学歴史学）

マシュー・M・ハーレー他『ヒトはなぜ笑うのか』、片岡宏仁（訳）、勁草書房、2015年

ISBN：978-4326154326

ヒトを理解するうえで笑いほどありふれているにもかかわらず、どう捉えればよいか分からない現象は他にないかもしれない。「ヒトはなぜ笑うのか。誰も私に問わなければ、私は知っている。しかし、誰か問うものに説明しようとすると、私は知らないのである」。これはアウグスティヌスが時間に関して自問した有名なセリフのパロディである。我々にとってあまりにも身近であるため、答えに窮する問い―。そういう意味では、笑いもまた哲学の格好の材料である。（ただし、時間の問題と同様、哲学の独占品というわけではない。）

本書『ヒトはなぜ笑うのか』は、著者の一人であるマシュー・ハーレーが、共著者のダニエル・デネットとレジナルド・アダムズJr.の指導のもとで完成させた博士論文から発展したものである。訳者の片岡氏がある研究発表の場で我々に伝えてくれたところでは、心の哲学において世界的な権威であるデネットの指導を受けるにあたり、ハーレーは笑いを研究テーマとすることを強く希望したが、当初は却下されてしまったそうだ。このテーマがくだらないという理由ではない。実際、デネットもそれ以前から、自ら笑いについて熱心に考察していたふしがある。だが、その成果に彼は満足することができなかった。笑いは研究対象としては「取扱注意」であることを、デネット自身がもっともよく理解していたのである。―難しい、難しすぎるよ。何か別のことを研究テーマにした方がいい[1]。

さて、笑いが表出される要因は一つではない。くすぐられたときの身体反応や、社交辞令としての笑顔なども広義には笑いの事例に含まれる。だが、もっとも興味深いタイプの笑いはユーモアと深く関係している。我々は何かにおかしさを発見し、それを愉快に感じる。このような刺激は完全に主観的ともいえないが、多くは文化や知識に相対的であって、探知されることではじめて生じるような何かだ。大雑把にいって、これがユーモアと呼ばれるものの基本的な特徴である。しかし、このように述べたところで、探求はまだほとんど進んでいない。ユーモアに関してさらなる問いを提起することができる。

少なくとも二つの課題に取り組まなくてはならない。第一の課題は、「ユーモアの発生条件」に関する問いである。

（１）何がユーモアをもたらすのか（我々はどのようなときにユーモアを感じるのか）。

そして、第二の課題は「ユーモアの存在理由」に関する問いだ。

（２）ユーモアは何のためにあるのか（ユーモアはなぜ我々の社会に存在するのか）。

これら二つの問いに対して何か一貫した見通しを示すことができたとき、笑いをめぐる冒頭の問いに何か実質的な答えを与えたことになるだろう。さらには、人間本性の一つの重要な側面もあきらかにすることができるにちがいない。ユーモア研究のもっとも大きな目的はここにある。

第一の課題に関しては、多くの哲学者がこれまで様々な見解を示唆した。ここでは、本書でも検討されている七つのユーモア理論のうち、特に有力とされる二つを紹介しよう。ホッブズの考えに代表される「優越説」によれば、誰かの欠陥との比較により、自分が優位にあることを不意に認識するとき、笑いの情動が生じる。他人がバナナの皮でスリップするというような場面を見て笑うことは、この種のユーモアの典型例であるといわれる。他方、カントとショーペンハウアーに代表される「不一致説」によれば、予想されたことと実際に起きたことの不一致が認識されるとき、笑いを誘うユーモアが生じる。『一休さん』などに見られるとんち話の多くは、こうした期待と裏切りをうまく活用したユーモアの例といえるだろう。どの理論にも

それぞれ一長一短はあるが、必要な修正を施した最善の見解を取り出すことで、ユーモアの発生条件に関する問いに一つの回答を示すことができる。

第二の課題には、ユーモアに特有の困難が潜んでいる。他の情動について考えよう。性的衝動（リビドー）が存在する理由は分かりやすい。それはしかるべき状況において、生殖行動を確実なものとするためにある。恐怖心はどうか。それはおそらく、外敵やその他の危険を察知し、自分の身を守るために発達したと考えられる[2]。ところが、笑いの情動はそれほど単純には説明できない。ベルクソンは、この問題に取り組んだもっとも影響力の大きい哲学者である。著書『笑い』において彼は、機械的なこわばり（あるものに対する偏執的なまでのこだわり、あるいは硬直した態度や習慣）こそが滑稽なるものであり、笑いはそれに対する懲罰だと述べた。これを裏返すと、ユーモアとそれに誘発される笑いは、絶えず環境への適応を求め、しなやかな生を取り戻そうとするヒトの自然な反応であるということになる。しかし、この見解はベルクソン哲学の我田引水のきらいも強く、やや思弁的で科学的な説得力を欠く。

これらの古典的な先行研究も踏まえつつハーレーらは、ユーモアの発生条件と存在理由に関わる二つの問いに統一的に答える、シンプルな説明モデルの提示を試みる。発生条件に関する問いに対してはまず、不一致説のある種の理論的改良によって、ごく荒っぽくは次のような回答が与えられる。我々はしばしば（思考の経済を維持する上では不可欠でもある）様々な思い込みに囚われるが、ユーモアはそこから生じる思考のバグの発見に関わる。そして、このバグを除去する作業への報酬として愉快さの情動がもたらされる。つまり、ユーモアはバグ取りの喜びである[3]。そして、ユーモアの存在理由についても、ここからストレートな答えが導き出される。それはこうだ。バグ取りを怠ると、現実との乖離がいちじるしいものとなり、データの整合性がそこなわれる。これは生存にとってきわめて不利である。だから、ユーモアには適応上の大きな意義がある。

このモデルは他にも多くの利点をもつだろう。ユーモアが思考におけるバグの除去に関わるとすれば、そもそもバグが生じるほどの高度な認知が可能な生物でない限り、おかしさの発見を愉快に感じ、自発的に笑うということもない。だからといって、ヒトのみが笑う動物であると結論することは性急だが、単に表情筋を動かして笑顔を形成するだけでは本当に笑ってはいない、そのようにはいうことはできる。また、ハーレーらのモデルはベルクソンの見解とも対立しないが、進化論的な観点から見て、より科学的に洗練された理論であるといえるかもしれない。（本書ではモデルの提示に先立って、「認知的・進化論的ユーモア理論のための20の問い」が挙げられている。ハーレーらがこれらの問いすべてに適切に答えられているかどうかは、読者の検討に委ねよう。）

他方、このモデルの弱点も慎重に吟味しなければならない。すでに述べたように、ハーレーらのモデルは不一致説のある種の改良版と見なされる。それが従来の理論にまさるかどうかは、不一致説にそぐわないユーモアの事例をどれだけうまく取り込めるか（そして、ユーモアとはみなされない事例をどれだけうまく排除できるか）にかかっている。たとえば、一見したところ優越感に起因するように思われる笑い（他人のどじを見たときの笑い）は、このモデルでどれほど自然に説明されるだろうか。さらに、進化論的な理論一般にまつわる懸念もある。ある機能の存在を説明するために、進化論に訴えることはトリビアルなのではないか。また、そのような理論のもっともらしさは実際に検証可能だろうか。ハーレーらはこれらの批判にも十分に自覚的ではあるとはいえ、彼らの議論を精査する必要はあるだろう。

さて、本書の先には、ユーモアと笑いの研究にとどまらないより大きな目標も示されている。ヒトの認知システムの全体を明らかにするという壮大なプロジェクトだ。ハーレーらは、ヒトの知性において情動はけっして不合理な厄介者ではなく、それなしには成り立たない積極的な機能をもつと考えている。ユーモアを説明する彼らのモデルでも、愉快さの情動はバグの発見を促す駆動的な役割を与えられていた。哲学ではこれまで伝統的に、ユーモアや笑いは興味深い余談として短く語られることが多かったが、そこには知性における情動の役割を軽んじる根拠のない傾向があったのか

もしれない。いずれにせよ、本書はこのような傾向に根本的な反省を迫るきっかけを提供するだろう。

ユーモア研究へのハーレーの情熱がデネットを説き伏せた結果、本書はめでたく世に送り出された。我々は今やそれを、非常によく練られた翻訳を通じて読むことができる。多くの具体例が紹介されていることも本書の魅力の一つであるが、よくいわれるように、ユーモアの受容はしばしば文化的背景の共有を前提とする。機械的な翻訳では絶対に伝わらない、数々の絶妙なアメリカン・ジョークを秀逸なジャパニーズ・ジョークに読み替えることにも、本書は大きな成功をおさめている。これらの具体例に触れられなかったことはとても残念だ。しかしながら、ユーモアのセンスは文化相対的である一方、笑いという現象が人間社会に普遍的に見られるという事実は、改めて考えてみると驚くべきことではないだろうか。

１　ハーレーとの最初のやりとりについては、本書に関する講演の冒頭でデネットが自ら語っている。その模様は、以下のいずれからも視聴することができる。

Daniel Dennett, "Humor", CARTA: Is the Human Mind Unique?

- YouTube: https://youtu.be/jmfMyfu4NX0?t=1m
- University of California Television: http://www.ucsd.tv/search-details.aspx?showID=24981

２　高度な認知能力を有するヒトの場合、実在とは関係のないフィクションや、遠い未来の出来事を恐れるといった一見ムダな機能も見られるが、生存のもっとも基礎的なレベルでは、恐怖心が危機回避に役立つことは否定できないように思われる。同様のことは性的衝動に関してもいえる。

３　より正確には、ユーモアの発生には５つの条件があるといわれる。すなわち、（ⅰ）メンタルスペース内に活性化した要素があり、（ⅱ）それはひそかに入り込んでいて、（ⅲ）そのスペース内で真と受け取られているにもかかわらず、（ⅳ）まさにそこで偽と判断される。ただし、そのとき、（ⅴ）マイナスの情動的な誘因価をともなわない（本書205－６頁）。